

## カンパラ通信～ナカセロの丘から

### 第12回 ウガンダの地方に展開する若い「日本大使」諸君

ここウガンダでの6月の一番のハイライトは、前回のカンパラ通信でもご紹介しました難民を温かく迎え入れているウガンダが広く紹介された難民に関する連帯サミットでしょう。首都カンパラ郊外のムニョニョリゾートで22、23日の両日にわたり開催されました。この会議は、ウガンダのムセベニ大統領と国連のグテーレス事務総長が共催者となって、急激な難民の流入を受け入れているウガンダに対して国際社会がその負担を分かち合うことを呼びかけるものです。日本からは、岸外務副大臣に来ていただき、このサミット会議に出席して日本の難民支援策を表明していただくとともに、ムセベニ大統領やルグンダ首相と会談しまして、日本の差し伸べた貢献をしっかりと印象付けてもらいました。この他、グランディ国連難民高等弁務官やビーズリー国連世界食糧計画事務局長とも今後の協力について話しました。

しかし、今回の本題は、青年海外協力隊を取り上げます。というのも、私は、この6月に2年の任期を終了して帰国する隊員8名の挨拶を受けました。そして、7月7日にはちょうど折り返し点にある1年を経験した隊員が着任したばかりの12人の新入隊員に自分たちの中間活動報告する会がありました。報告会の終了後これらの隊員全員に公邸に来てもらって個人的に話を聞く機会もいただきました。そういう時期にぶつかりましたので、ウガンダで活動する隊員のことを紹介したいと思います。



中間報告会の模様



中間報告会後の懇親会

青年海外協力隊は、知る人ぞ知るなのですが、知らない方もいるかもしれないので、まずは、青年海外協力隊とは何かについてお話しします。青年海外協力隊は、JICAの名で知られている国際協力事業団が実施している開発途上国に若い人を派遣する事業で、開発

途上国の人々と共に生活し、働き、彼らと同じ言葉で話し、相互理解を図りながら、彼らの自助努力を促進するように活動する、草の根レベルのボランティアです。「青年」と言っているだけに、対象年齢は20歳から39歳となっています。それでは、40歳以上であっても開発途上国の役に立ちたいという人々はどうなるのか、というと、そこはシニア海外ボランティアという名前で同じようにボランティアする道が開かれていますので安心して下さい。ウガンダには、7月1日現在で77人の青年海外協力隊員と3人のシニア海外ボランティアが活動しています。活動地域もほぼウガンダ全土に広がっています。彼らがどんなことをしているかと申しますと、ひとつには村落開発隊員という方々がいます。ウガンダにおける我が国の開発援助の重点分野の一つであるネリカ米の振興を各地で助けたり、JICAの援助で設置された井戸の管理の手伝いをしています。次にウガンダの小学校や中等教育校に派遣されて、理数科の教師、PC教育に従事したりしています。最近では、東京五輪が近づいてきているせいか、体育の教師をする人が増えているような気がします。病院に派遣されて、5S活動を推進する看護師とか医療機器の保守点検を担う技師の人もおります。



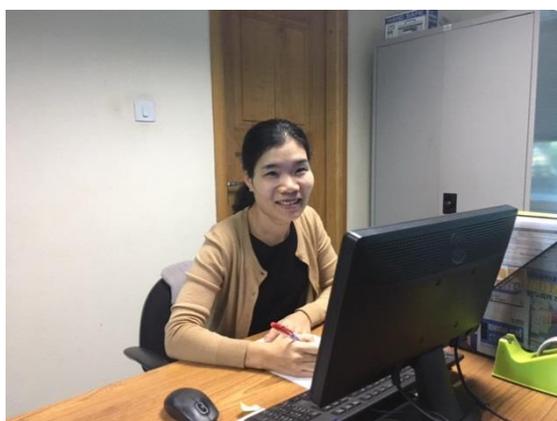
イガンガ女子中等教育校配置のPC隊員



ジンジャ病院勤務の看護隊員

これらの人は、電気や水もままならない僻地で勤務している人が少なくありません。このようなところでは若い女性が苦勞するのではないかとついつい心配してしまいます。食べ物も現地の人と同じようなものになってしまいます。肉も日なたの店頭にぶら下げているため、怖くて食べられないと言います。せめて中華料理店くらいあれば助かるのですが、とてもそのような田舎ではありえない話です。私は、年に3回開かれる中間活動報告会にはできるだけ出席して彼らの活動ぶりを知ろうとしています。そういう中で、隊員にとっての一番の苦勞は、対人関係だと思っております。経験もあまり積んでいない若い見知らぬ外国人が突然地域コミュニティにボランティアだといって現れても、現地としても受け入れがたい気持ちになることは良く理解できます。その上英語もよくできないとなるとどのように扱っていいか困ってしまうのは当たり前ではないでしょうか。他方、青年海

外協力隊員の方も、現地の方と付き合う距離感がわからず、日本社会的にあまり言いたいことも言えずに悶々としてしまうことも納得するところです。隊員の受入れ先ではだいたい面倒を見てくれる現地人のカウンターパートがいるようなのですが、この人との相性が現地コミュニティで自らの活動を円滑に開始できたり、コミュニティでの人間関係を構築する上で大きく左右するようです。この出会いの運不運により、しばらく落ち込むのか、あるいは充実したスタートを切れるのか、大きな分かれ道のようなのです。どの時点で巡り合うかは別として、ほとんどの人は任期が切れるまでにはいい出会いがあつていい気持で帰国しているようです。そのせいか、再びウガンダに戻ってくる青年海外協力隊経験者が少なくありません。カンパラの中古車販売会社で勤務したり、JICAや日本のNGOの地方で展開するプロジェクトに参画したり、といろいろです。当大使館でも青年海外協力隊経験者に働いていただいています。オティム美千子さんといい、大変頼りになる存在です。



大使館で勤務中のオティム職員

私は、青年海外協力隊員との接触は今回と、前回10年前にウガンダにいた時の2回ですが、いろいろな隊員とお会いする機会がありました。その中でも最も印象に残っている隊員は、熱血漢だった小田島野球隊員です。小田島隊員は、札幌で中学校の教師をしていて大学時代までやっていた野球を活かし、国際貢献の夢を持ち、海外青年協力隊を30歳を超えてから挑戦しました。しかし、なぜか試験に7回(!)落ち続けましたが、最終受験年齢に達した8回目の試験でついに合格し、2006年9月から2年間ウガンダの中等学校で野球部の少年に野球を使って、夢を追うことの大切さ、夢を実現するために規律正しく生活し、物を大切にし、約束を守ることの重要性を徹底に身につけさせました。そして、さらに凄かったのが、そのような少年たちに日本で野球をプレイさせたいがために、地元北海道のTV局をウガンダまで連れて来るなどしてキャンペーンを展開して、野球選手全員の札幌遠征の費用を捻出しました(私を含む大使館員も寄付をしました。)。2008年1月にはそれを実現させ、現地では札幌ドームで地元のチームと親善試合を経験させました。真冬で雪だらけの北海道滞在中には登別の温泉を経験させるなど、少年たちの北海

道での滞在の様子はTV中継されました。とにかく、小田島隊員の実行力と熱血ぶりは感動ものでした。



北海道に遠征したウガンダ野球チーム

さて、私は、青年海外協力隊員を今回のカンパ通信のタイトルにした「若い『日本大使』諸君」と呼んでおります。何故なら、他には日本人がいない地方のコミュニティでは、彼らの発言、彼らの行動ひとつひとつが日本を代表する「大使」のように捉えられるからです。地元の人にとっては、彼ら隊員一人一人が日本人についてのイメージとなってしまうのです。ですので、日本人としての誇りをもってウガンダ人の善良な友人として誠実に振る舞ってもらいたいと常々伝えています。

なお、青年海外協力隊員として開発途上国に長期間過ごすことは、何よりも日本がどんな国であるのか見つめるいい機会です。日本と違う環境で暮らす中で、そして現地の人から投げかけられる日本についての質問に対する回答を探る中で、日本がどんな国か考えさせてくれるからです。2年間の開発途上国で暮らすうちに日本をディスカバーすることでしょう。もう一つ重要なことは、文化や価値観の違いに直面して、日本の環境での視線から安易に批判するのではなく、現地の歴史や社会、文化背景をよく理解して私たち日本人と違った行動をとるのか理解しようと努めることです。現地の相手によく話を聞くことが相互理解につながるのではないのでしょうか。そういう姿勢をとれるようになることが人間として成長させてくれると確信しています。隊員としての成果は、現地の人たちに自分が何をしてあげられたかではなく、このように現地の人たちからいろいろ教えてもらって、日本人として、いや人間として成長させてくれたかを実感することではないのでしょうか。

(以上)